

卒業制作・論文作品集 2

畿央大学

健康科学部 健康生活学科
人間環境デザイン専攻

2007

The 2nd Graduation Works.
Kio university
Course of Human Environmental Design.



御挨拶 Preface

この度本学において健康科学部健康生活学科人間環境デザイン専攻2期生として、晴れて卒業認証の成果を発表する機会を迎えました。誠に意義深いよるこびであります。一作毎にこめられた建造物や服飾デザイン等に対する創造性、機能性に緻密な感受性が表現されております。そして、美しい夢の実現に向って人間性豊かな愛の深さを沁み沁みと感じさせられるものであります。これ即ち本学創立以来60有余年にわたる建学の精神の真髓の発露であると思えます。その稔りである作品ごとに今更の如く深い感動を覚えるものであります。

卒業後の皆さんが更なる研鑽を積み、畿央大学における研究の真価を発揮されんことを期待し教員始め皆様方の変わらぬご指導、ご支援をお願い申し上げます。次第でございます。

畿央大学 学長

冬本智子

制作
Works

Home stadium



西嶋 健太郎
Kentaro Nishijima

藤井ゼミ

サッカースタジアム+住居=HOME STADIUM

サッカーコート上空に広がる空中都市。住みながらにしてサッカーを見る住人達。

新しい観戦スタイルから生まれる興奮がスタジアムを包みこむ。



Special thanks to Teruaki, Takaya, Hiroki, Masaki, and Momoko.



地場産業の企業から出る廃材の研究



美馬 利雄
Toshio Mima

村田ゼミ

畿央大学の位置する広陵町では、古くから地場産業として靴下製造が行われてきました。靴下のかかと縫製工程で出る切れ端を「ロツソ屑」と呼び、そのロツソ屑は座布団、鍋敷きなどの手芸材料として利用されています。環境問題に関心のある私は卒業研究で「ロツソ屑の再利用」に取り組みました。速乾性、保温性に優れている特性を活かし、異素材と組み合わせるために、上記であげた作品等には使われていない私が考えた手法「ねじり編み」により、マットとスリッパを制作しました。マットは約83cm×約78cmで675人分の靴下の廃材を利用しました。



美術館(博物館)の休憩スペースに置くイス

井上ゼミ

美術館(博物館)で精神を集中させて作品鑑賞をすることはとても疲れることである。そのため、各展示室の間など随所に休憩スペースを設け、外の景色で目を休めたり、外の新鮮な空気に触れたりすることができるよう配慮がされている。休憩スペースは気分を切りかえるポイントといえる。立地条件によって外の景色を見ることができる美術館(博物館)もあり、そういった休憩スペースで景色を見ながらよりリラックスできるイスを制作する。

森本 実希
Miki Morimoto



Petit Plaisir

食器に盛られた小さな幸せ



山形 綾香

Ayaka Yamagata

中山ゼミ

障害者や高齢者、普通に私たちが生活している中でも、食事中に汚れてしまうことがあると、人前で食事することに臆病になってしまう。

そのような心の障害を、ユニバーサルデザインを取り入れた食器で軽減する。

食事の場面に『小さな幸せ』を演出する。



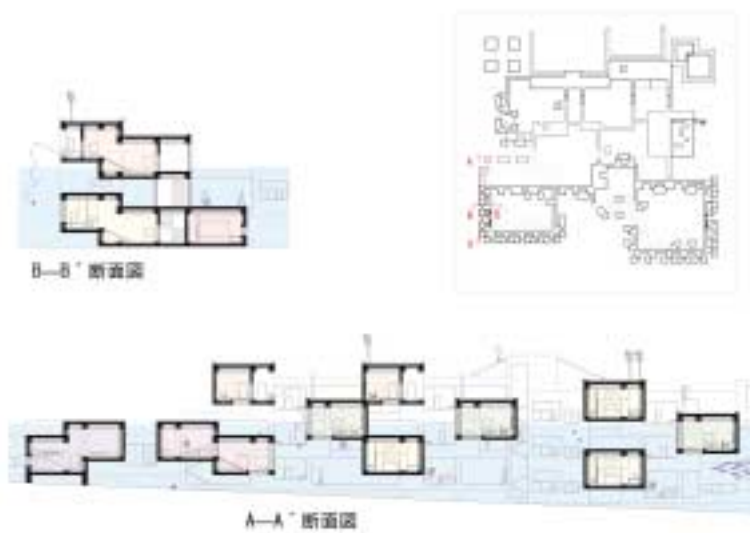
吉村 文里

Ayari Yoshimura



藤井ゼミ

本州で唯一生息するテーブル珊瑚や、熱帯魚などの海の生物を、水族館のように部屋やレストランから見える空間の提供をメインに、釣りができる部屋、水面が窓から見え波がぶちあたる部屋などで顧客を増やし、町全体の活性化を計る。



車椅子の人の動線を考えたテーブルの制作



松川 武司
Takeshi Matsukawa

井上ゼミ

車椅子で生活する人がいる家庭の問題点として、動線と食卓に注目してみました。狭い居住空間の中で、限られたスペースを有効に利用することは出来ないかと考え形がまりました。

また、車椅子のかたちが一般のものとは異なるため、市販のダイニングテーブルでは食卓に着くことができず、家族がバラバラで食事を摂っているのを見て、家族全員で食事をして、家族団欒の時間をつくることはできないかと考え制作しました。



みんなが楽しめる図書館



芥川 友美
Tomomi Akutagawa



門口 智恵
Chie kadoguchi

李ゼミ

図書館は、私たち学生が勉強や授業での調べものをするには無くてはならない存在である。

また、学生だけでなく、高齢者や小さな子供まで、誰もが利用する図書館は皆が快適に利用できるものでなければならない。近年問題視されている高齢社会や、若者の活字離れによる図書館利用者の減少、偏りをなくすことを目的とし、町立図書館のリフォームを通じて本に興味のない人でも足を運びたいくなるような、誰もが楽しめる図書館を考案。



ユニバーサル デザインキッチン



阿曾沼 大知
Daichi Asonuma



山本 敬博
Yoshihiro Yamamoto



中山ゼミ

現在のキッチンの抱えている問題点として、動作範囲が広い作業がしづらい・収納スペースが不十分である・収納の設置位置が悪く使いづらいなどがある。特にキッチンまわりは水や火ばかりでなく、いろいろな道具を使う場であり、すべての人にとって使いやすさや安全への配慮が欠かせない空間である。いくつかの使いづらと感じた点を改善し、安全で『誰にでも使いやすいキッチン』を考えた。



ハチノス (ディスプレイカウンター)



井口 惟史
Tadashi Iguchi



井上ゼミ

六角形を自分なりに組み合わせて利用します。ブロックや積み木のような「遊び」を実用することを目的としています。六方向への表現ができるので、より幅の広い表現ができるのではないかと思います。六角形という形にしています。また、木材を使うことで自然な暖かみと、場所を選ばない普遍的な存在感を持たすことができるのではないかと考えています。

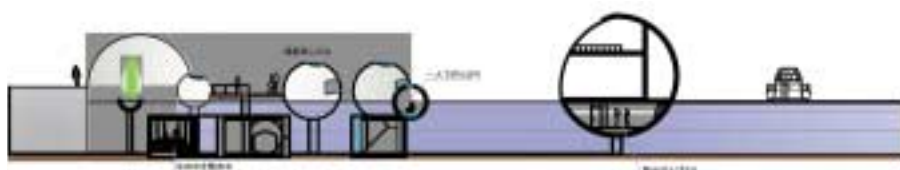
道頓堀川のやどかり



石田 香織
Kaori Ishida

藤井ゼミ

道頓堀川の深里橋に親水公園を造る。「やどかり」をメインに、劇場などを設け、江戸期に栄えていた道頓堀川の様な、賑わいと和みの空間を造り出す。上から眺めているだけではなく、実際に川の中へ潜ることで、「きれいな水槽」と「汚い川」を同時に体感出来る空間を作り、水に親しみながら川へ意識を向けさせ、水質改善に繋げる。



地域を結ぶ憩いの場



井上 博喜
Hiroki Inoue



尾濱 哲也
Tetsuya Ohama

李ゼミ

閉鎖的で暗い雰囲気の対象物を、馴染みの浅い年配者を含めた地域の人たちが集まれる環境にリフォームする。1階に足湯を設置することで、足を運びやすい環境をつくり、利用者通しが気軽にコミュニケーションを取れるようにする。空きスペースの有効利用を工夫することで、不便さを改善し、利用しやすくする。遊戯室のデザインや色彩、家具の配置の変更を行うことで交流やコミュニケーションに適した居心地の良い空間に仕上げる。





Universal Design収納

その1

井上 智子

Tomoko Inoue



中山ゼミ

使うのが楽しくなるような食器棚。
高齢者や障害者でも簡単に収納できるようにユニバーサルデザインを取り入れ、
使う人もキッチンも明るくなるようなデザインを目指した。



Universal Design収納

その2

山口 蛍

Hotaru Yamaguchi



中山ゼミ

さまざまな部分にユニバーサルデザインを取り入れたクローゼット。
一つのアイデアに縛られるのではなく、
多くのアイデアを取り込むことによってより機能的なクローゼットを目指した。

フリーソフトでの 日本語フォントの制作



今井 太一
Taichi Imai



栗林 友和
Tomokazu Kuribayashi

金敷ゼミ

フリーフォントの制作 漢字、第一水準、第二水準、ひらがな、カタカナ、英語、記号等をデザインし、作りました。

フォントというものを使うとき、案外自分の使いたいフォントがないので自分たちの使いたい、α可能性の高い字体を目指して作りました。制作したものをフリーフォントとしてWeb上で配布することにより、自由にダウンロードすることが可能になり、英字フォントと比べて文字数が多いが故に絶対数の少ない日本語のフォントのバリエーションの一つとしてこのような字体を必要としている人の選択肢の一つとして選ばれれば光栄です。



長く使える ベビーカーの提案



良 和也
Kazuya Ushitora

井上ゼミ

私はベビーカーというのは、生まれて最初に乗る乗り物だと思っています。それをわずか2、3年で使わなくなるというのは、とても勿体なく思いました。それならばより多くの使い方や長い間使えるものになれば子供が大きくなるにつれて様々な思い出もでき、もっと物を大切にしてくれる子(人)が増えてくれるのではないかと考えこのテーマを卒業制作の課題としました。

その為にベビーカーの特性やベビーカーを使っているいらっしゃるお母様やお父様方にアンケートを生かし、ベビーカーに取り入れる事の出来ると思われる様々な機能を考案、制作しようと思いました。



ライブハウス



梅尾 香織
Kaori Umeo



三井田ゼミ

ライブハウスは地下に出店しているものが多く閉鎖的で近づき難い雰囲気がある。同じライブ空間でも野外フェスティバルは自然と融合して企画されるものが多いのでその特徴をライブハウスに取り入れた。りんくう公園は昼、夕方、夜でそれぞれ違った景色を楽しめるので、それぞれの景色がステージの背景になるようにした。ステージの後ろは海になっていてホール内からは海しか見えないようになっている。



rest home



浦上 明子
Akiko Urakami



藤井ゼミ

環境が良い場所での長期入院(療養)が必要なせんそくの子どものための病院と、その子どもの看護のために付き添う家族の宿泊施設を提案。子どもが病気になったとき、親は子どものそばで看病に専念しようとする。病院の廊下で寝泊まりする家族、毎日遠くから病院に通い体を壊してしまう親...そんな家族の状況を少しでも変えたいと思い、病室と家それぞれの雰囲気が目で見て感じられるお互いに安心していられる関係になるように家族の住む場所を考えた。

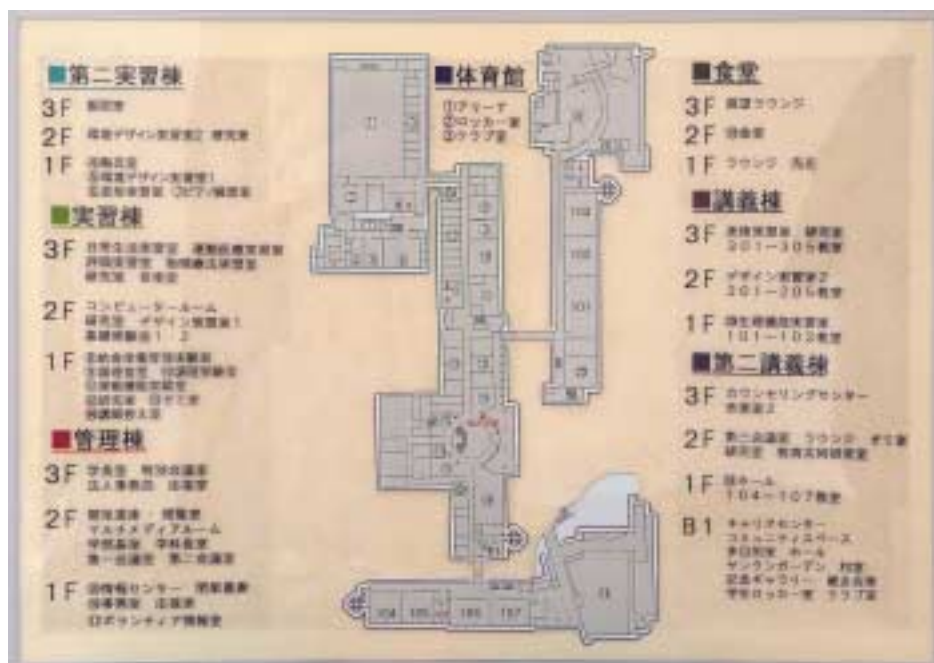
学内標示物の 視認性改善デザイン



浦西 陽子
Yoko Uranishi

東ゼミ

高齢社会においては、様々な視覚能力を持っている人に理解しやすい視覚情報表示を計画することは重要な課題である。そのためには表示物の設計条件だけでなく、設置される周辺環境条件を視認性に影響する要因として考慮する必要がある。そこで、環境条件に適合した案内板のデザインを検討し、視認性の向上を試みた。



四季に触れ 自然を感じるものづくり

子どもたちと染色で



大石 悦子
Etsuko Oishi

村田ゼミ

幼稚園・保育園における「環境」の分野で自然物を使ったものづくりが注目されていると聞き、園の先生が子どもたちと取り組めるような染色指導教本を作成しようと考えました。そこで、四季の草木染めを年間行事に取り込み、季節の植物を利用した染色の方法や行事に沿った作品の制作方法を示しました。また、簡単に実践できることと、楽しく安全にできることにも重点をおき、実際に園に出かけ現場の声を取り入れながら2冊の本に仕上げました。



古民家再利用

大橋 英子
Eiko Ohashi



三井田ゼミ

私はゼミの活動で測量させて頂いた学長先生のご実家を、冬木学園の創りの場所でもあることから学園のための施設に再利用できないかと考えました。そこで、冬木学園の学生・生徒の合宿等の活動に利用できる学園のセミナーハウスに改修し、空き家だった日本家屋を新しい形で蘇らせることを提案します。母屋をキレイにリフォームしゼミ・合宿等が行える研修施設に。宿泊施設を増設し10人程度の宿泊が可能な施設にしたいと思います。



介護服の改良に関する研究

香川 祐樹
Yuki Kagawa



村田ゼミ

現在我が国には、制度上家族による介護を余儀なくされている家庭が数多く存在する。

日常の在宅介護の中で、毎日行われる「着替え」「オムツ替え」が介護者にとっていかに負担のかかるものであることは、実際に身内を介護している私には、よく分かることである。

卒業研究では、介護服についての値段、素材について調査し、介護者にとって、着脱面・経済面での負担を減らした普段着を制作した。



キッズルーム

カラーブロックの美容室



木越谷 守

Mamoru Kikoshitani

李ゼミ

既存の一般的な大人向けの美容室ではなく、子供専用美容室の提案を行う。事前に「子供が好む色とおもちゃ」に対する2つのアンケート調査を行った結果に基づいて「ビビッドトーンカラーのブロック(LEGO)をモチーフとした、子供専用美容室」の制作を行った。



無機質な美術館を あたたか味のある空間へ



北岸 雅大

Masahiro Kitagishi

李ゼミ

無機質な美術館をあたたか味のある空間へ大阪市立美術館を天王寺公園に似合うものにする。

まず公園という所は人々に「安らぎや憩い」といった、心の休息を求めてやってくる場所。と私は思っています。

公園にある木という緑色

美術館の壁の色や周りの物をつかって。

色という視点からこの空間を「安らぎとあたたかさ」を与えられるような、どこかホッと空間にしたいと考えました。



子ども服の安全性についての調査

アンケート調査結果により
安全な子ども服の改善案

葛原 弘恵

Hiroe Kuzuhara



村田ゼミ

近年子どもの事故が多発しています。東京都は、子ども用衣類に起因する事故調査結果を平成19年に発表しました。そこで私は、この近隣地域における子ども用衣類の安全性について調査を行い、その結果、「フードが引っかかったことがある」「ポケットに手を入れていて転倒した」等多くの問題があげられました。そしてフードの改良、ポケット位置や形の検討を行った安全な子ども服を制作しました。



思いを継承し、 通え合う場所へ

上坂 洋介

Yosuke kousaka



上妻 加奈

Kana kouzuma



三井田ゼミ

一人の教師がこの場所で教育を始めた。月日が流れ、その教え子たちが、教育をこの地に再び呼び起す。初めて柳本の地を訪れたとき、ゆっくりとした時間の流れを感じ、そこに好奇心のようなものが湧き出るのを感じた。「人との繋がりが強固な中で、先人の知恵を得られる環境の中で時を過ごすことによって、現代の私たちに欠けている、モノを大切にできる心」が、養えるかもしれないと。



NGP梅新

商業ビルを公園に

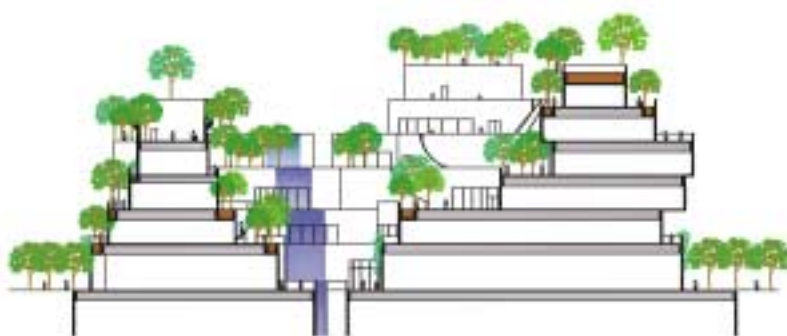


米虫 佳織

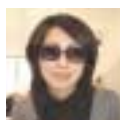
Kaori Komemushi

藤井ゼミ

都会の真ん中に公園をつくる手法として、建物であり、同時に公園でもある商業施設を作る。「段々畑」をモチーフとし、たくさんの緑と川の流れを基調とすることで、のんびりとした時間を楽しむ空間を提案する。



関西中央高等学校 リメイクプロジェクト



阪上 友美

Tomomi Sakaue



秦 麻衣

Mai Hata

三井田ゼミ

これからの教育空間は、先生から教えられる授業と、自発的に考えるということに分かれると思う。

従来の普通教室では、先生と生徒の間に距離ができ、授業時間外の交流が減っている。教科型教室にすることにより、先生とのふれあいや生徒の自主性を伸長することができると思う。

だから、私たちは、これからの学校の教育の場として教科型教室を提案します。



EQUIPMENTケータイ



EQUIPMENT



里村 陽平

Yohei Satomura



井上ゼミ

昨今、携帯電話は老若男女多くの人を持ち、また生活に欠かせないものとなっています。現在ちまたで主流の携帯電話は、一つのツールとしてポケットやカバンなどに入れて持ち歩く形となっています。着信やメールチェックするとき、それらの場所から取り出して使います。今回私が立案する携帯電話のコンセプトにはそのワンアクションを取り除くことにあります。腕時計のように身につけて(EQUIPMENT)使う携帯電話です。ツールとしてではなくファッションとしても使える携帯電話を立案します。



安らぎと機能性のある マンション空間

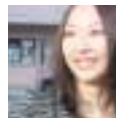
塩崎 恵美

Emi Siozaki



山本 美幸

Miyuki Yamamoto



中山ゼミ

障害者・高齢者・健常者や、すべての人達にとって優しく、自立して一人暮らしが出来るユニバーサルデザインマンションの提案を目的とする。

インテリアのテーマを「和風モダン」としてデザイン。

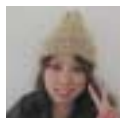
「安らぎである心理面」と「機能性を重視した身体面」の双方から検討することによって、こころとからだのバリアフリーを実現して、ユニバーサルデザインなマンションを設計した。



南側立面図

SOHO TOWN

あやめ池再生計画



柴田 晴菜
Haruna Shibata

藤井ゼミ

小さな会社は、それぞれに会議室や印刷室、社宅、食堂などを持つことが困難。

しかし、小さな会社がいくつも集まり、それらを他社と共有することで、大企業と同じような環境を整えることが可能になる。そして、色々な専門の企業が何社も集まることにより、仕事を共有することもできる。

そんなオフィスの街を作る。



Display at stair



下村 修治
Syuji Simomura

藤井ゼミ

コンセプトは「動く」。様々なディスプレイ方法により見て→惹かれ→移動する、そういう風に人の移動に重点を置き、アパレルビルでのショップ内、ショップ間の移動をディスプレイ方法で考え設計する。





「奈良の葛」を用いての ものづくり

白網 有希
Aki Siratai



村田ゼミ

奈良県の特産物である吉野葛は葉・茎・根のごも捨てるところがないエコロジカルな植物です。その葛が最近、商標登録が認められたという新聞記事を読んで興味がわき、授業で学んだ草木染の材料としました。ストール:経糸は染めた糸、緯糸は母から譲り受けた着物を使い裂き織しました。モチーフは葛の葉で染めた糸で大小花型に編み、ストールに縫いつけました。ドレス:母から譲り受けた着物をほどこ、柄の配置を考え、シンプルな形に仕上げました。

タロットカードの制作

高松 靖光
Yasuhiro Takamatsu



金敷ゼミ

『DEUS EX MACHINA ~機械仕掛けの神~』
機械仕掛けの神という題材からカードの絵柄をすべてロボットで動く。



ファッション性と機能性 をかねそなえた鞆制作



田中 由紀
Yuki Tanaka

村田ゼミ

アンケート・市場調査を基に“ファッション性と機能性をかねそなえた鞆”を制作しました。外見は売れ筋から共通点を見出し、素材は合皮を使うなど出した条件を満たすように心掛けました。内装はポケットを充実させ、仕切りも付けて出し入れ・整理整頓しやすいものになったと思います。基本はトートとして使えますが飾りのベルトをばらして縦に付け替えるとリュックとしても使えます。



The base of music lovers



檀上 晃一
Koichi Danjo

藤井ゼミ

クウカン、

オンガクで

色付く



個人認証システムとしての 紋章付プロダクトの制作

辻本 秀彰

Hideaki Tsujimoto



金敷ゼミ

紋章は他の人から見ればその紋章を保有している本人を識別できるものであり、本人にとっては自分自身を他の人に誇示するなど、心理的な満足感や責任感を与えてくれる物であると思います。

また文字によって他の人に名前を知られたくはないが、その紋章によって特定の人(自分の紋章を認識している人)にのみ認識されることも可能です。

本制作ではマーケティング調査の結果にもとづき、以下の物を制作しました。

- ・篆刻
- ・スタンプ
- ・紋章入りカフリンクス
- ・紋章入りネクタイピン



布上への世界一周の表現

シルクスクリーンプリントをつかって

中尾 理加

Rika Nakao



村田ゼミ

私は2006年に101日間の地球一周の国際交流のための船旅をしました。そして、その船旅で出会った人々の笑顔、お気に入りの景色を何らかの形に残したいと考えました。様々な方法に挑戦した結果、細やかな表現が可能な「シルクスクリーンプリント」で行いました。露光時間、染料の濃度、図案の配置など試行錯誤を繰り返し遊び心のあるタペストリーと浴衣に仕上げました。タペストリーにはだまし絵として一番伝えたいピースマークを顔で作成しました。



筋電を用いたラジコン設計



中谷 威登
Taketo Nakatani

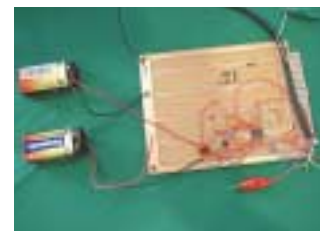


福井 将大
Masahiro Fukui

金敷ゼミ

『誰もが簡単に遊べる玩具作り』

1. 筋肉を動かすことで生じる筋電を増幅する回路(アンプ)を製作
2. 回路をラジコンのコントローラーと接続
3. 電位差を利用してON/OFFを切り替えることでラジコンを操作



駐輪スペース



中辻 旭大
Akihiro Nakatsuji

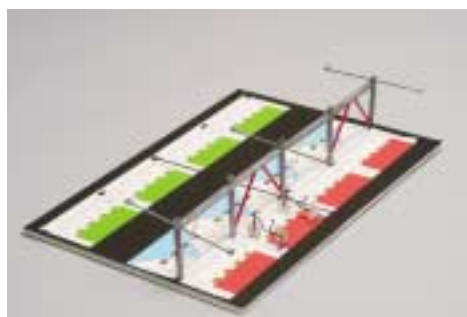


安場 孝史
Takafumi Yasuba

中山ゼミ

公共 現代の大型スーパーや駅前などの公共の駐輪場において、置いた場所が覚えづらい・適当に置かれると出し入れし辛い・上からのライトでは鍵穴が見つらいといった問題点に注目して、従来の駐輪場より床・柱の色や形状をデザインして使用者の視覚や感覚で感じて使ってもらえるような「体感的な解決」を目指した設計をしました。

個人 今まで一戸建て住宅において駐輪スペースという考え方がなかった。そこでそのスペースを確保し、人が中に入らなくていい構造で、コンパクトかつシンプルにしました。



KUJIRA

背骨空間



中林 祐貴

Yuki Nakabayashi



三井田ゼミ

緑に憩う、眺める、語らう…
コンクリートあふれる世の中、
“自然の学び舎”を作りたいと思いました。
生き物には必要な背骨。
建物にも必要である背骨。
これが壁であり廊下であり、
人が出会う道。
風が通る道。
散歩道。
いろいろな人や、自然に囲まれながら、
たくさんのことを学ぶ。
人生の出発であり、終点である勉強。
誰もが自然とともに出会い、旅立つ。
そんな‘学び舎’を作りたいと思いました。



子ども達と取り組むものづくり

藍の栽培から染色までの取り組み

中本 源

Hazime Nakamoto



村田ゼミ

最近、教育・保育の現場において、ものづくりの楽しさを子ども達に伝えるために、さまざまな体験・活動が取り入れられています。そこで私は大学の授業で学んだ「染色」を子ども達に楽しんでもらいたいという思いから、「染もの教本」の制作に挑戦しました。この教本には指導される方にも、子どもにも理解しやすいように、さし絵・写真をたくさん用いています。内容についても染め方だけでなく、土の作り方から次年度のための種とりまで、1年間を通じて季節を感じ、植物の成長を学びながら楽しめるようにしました。

地域に開かれたクリニック



永田 萌絵
Moe Nagata

李ゼミ

既存の堅苦しいイメージを与えない、もっと街や地域に開かれた施設にすることを目的とした。

清潔感と温かみを出すために[白]を基調にし、待合室には南側と東側に大きな窓を設けた。

明るい空間を作り出すと共に、外から待合室が見えるようにすることで、医院の存在や雰囲気周辺地域に伝えると同時に、患者が内部空間に身を置いた時に治療への緊張をほぐすためのリラクゼーション効果を与えるように配慮した。



JAZZ

商業空間におけるイスとテーブルの
デザイン提案



西田 恵美加
Emika Nishida

井上ゼミ

ジャズの生演奏やマジックショーが楽しめるステージがあるバーに設置し、高さ調整が可能で、店のイベントや来客数に合わせて自由に席替えができるイスとテーブルのデザインを提案する。

また、使用しない時にはコンパクトにスタッキングできるデザインとし、場所を取らないようにする。

壁に掛けて使用する新しいタイプで、壁面を彩るオブジェのようなデザイン、使用するお客にも店側にも優しい設計となるよう考案する。



堅上 フリースクール

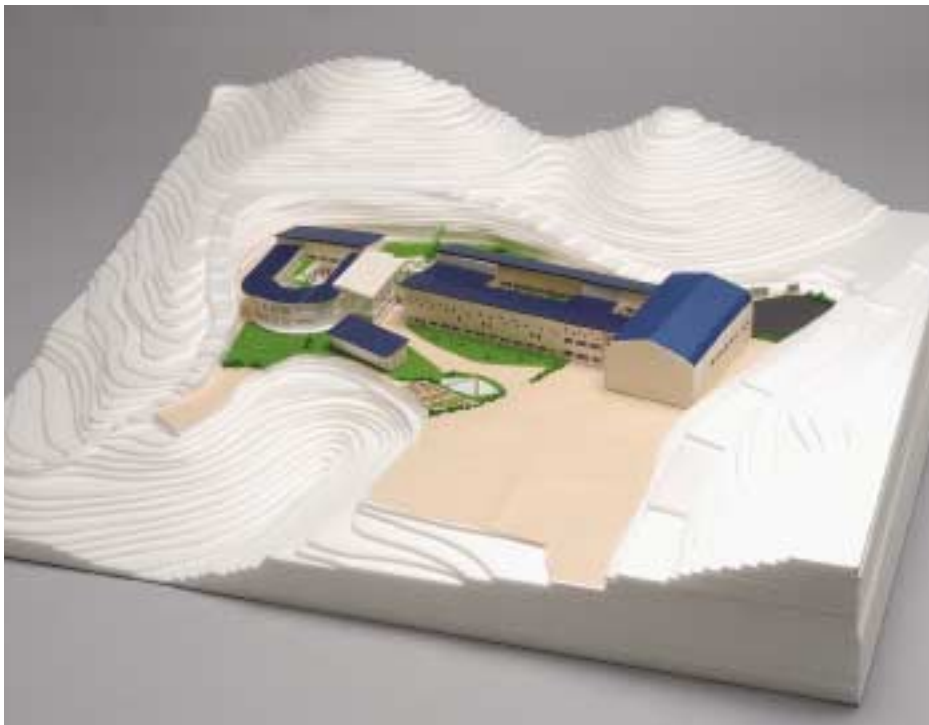
橋本 尚子

Naoko Hashimoto



藤井ゼミ

学校になじめず居場所をなくしていく子供たちにとって、自分の居場所がある学校を考えました。他人と交わるのが得意な子どもたちと、苦手な子どもたちそれぞれの校舎を完全に遮断せず、職員等をはさんで計画しました。性格の違った子供たちが同じ空間でゆっくりと成長できる学校を目指します。



コンテストへの出展

エレガントな時間の表現

林 沙紀

Saki Hayashi



村田ゼミ

4年間の集大成として、京都服飾デザイナー協会主催の『2007KDKファッショングランプリコンテスト』に応募し、自分の力を試そうと考えました。

創作のテーマは「エレガントな時間」です。流れるようなシルエットをバックスタイルで表現しています。

異素材の組み合わせとクラシックな素材感を活かしたデザインを融合し、全体に光沢感のある布地を使用し、ファーやニットでバランスをとっています。



ダイニングテーブル



堀 宏丞
Kosuke Hori

中山ゼミ

家庭にあるダイニングテーブルに注目して制作しました。本格的な高齢化社会に入っていくことで、一般の家庭に高齢者の在宅が増えていくと思います。また、障害者も対象にして、高齢者や障害者たち一人ひとりが持つ能力を最大限に伸ばし、できるだけ自立や車いすの利用者の使いやすさを考え、また、一緒に暮らす家族にも使いやすいユニバーサルデザインのダイニングテーブルを目的に創作しました。



しあわせ家族計画○



松井 大輔
Daisuke Matsui

李ゼミ

自宅のリフォームを通じて、これから高齢化を迎える夫婦の幸せを考える。夫婦二人だけの生活に向けて間取り、動線、計画の変更。バリアフリー化も考え、段差を軽減する。また、外観のデザインの変更も考える。老後の生活を明るく活気あるものにする為の可能性を模索する。



藍染め

藍の栽培から染色まで

元根 浩恵
Hiroe Motone



村田ゼミ

藍の青は太古の昔より、人々の暮らしに深く関わってきており現代社会においても、私達の心をいやす色です。その藍色を実際に自分でつくってみたいと思い、畑での藍の栽培～容器での発酵～発酵した液での染めに挑戦しました。のれんは筒を利用して縫い絞りをを行い、タペストリーは型のりと抜染のりを使用して、濃淡を活かす模様デザインしました。いずれも、自然の恵みが詰まった暖かい作品に仕上がりました。



座る人に合わせて調節 できるダイニングのイス

安木 菜津子
Natsuko Yasuki



井上ゼミ

家族で会話しながら、ゆっくり食事を
するダイニング。
その空間に必要なテーブルとイスで
すが、セットで販売されていることが多く、
デザインやコストとの関係で、イスはす
べて同じ高さに設定されています。
しかし、それを利用する家族全員が同じ
体型をしているとは限りません。そこで、
ダイニングセットを購入した家族の体型
の変化、家族構成に合わせて、すべてのイ
スが高さ調節できるダイニングのイスを
提案します。



緑の空間

憩いと安らぎ



山口 将巨

Masaomi Yamaguchi

李ゼミ

この公衆便所は大阪城公園内にあり、豊かな緑に囲まれている。この施設はそこにあって、第一に木漏れ日が降りそそぐ「憩いの空間」を目指した。シンボルツリーが中央にあり、休憩所には坪庭を設けた。これはこの建物自体が緑と融合するという狙いがある。

トイレの内装にはできるだけ木を使用することを心がけ、施設全体の調和をはかった。この場を訪れる人々が公園の自然を満喫できる場となるだろう。



家族になる場所

産婦人科医院+助産院



吉田 浩士

Hiroshi Yoshida

三井田ゼミ

この作品は、実りある時間を過ごせる空間とアメニティーを大きなテーマとしている。「自然出産」という待ち続ける時間を充実したものにするための環境づくりとして、母親教室やヨガなどが行える多目的ホールや母親同士のコミュニケーションの場、散歩が楽しめる環境を取り入れました。アメニティー（利用者が求める快適性につながるすべて）を重視した環境として、LDR（陣痛、分娩、回復をひとつの部屋で連続的に行うことができる病室）という分娩法を取り入れた設備や託児室（キッズルーム）、カウンセリング室を設けました。これらによって利用者の実りある時間と快適性を考えた安心できるプランに仕上がったと思います。



論文
Thesis

絹織物の染色ならびに光反射特性に関する研究

生糸への撚り掛けの影響



庄司 孝太郎
Kotaro Shoji

佐藤ゼミ

I. 研究目的

本研究は絹織物の男性用外衣への応用を目的として、特に太糸の繭糸を作る蚕品種「ありあけ」を用い、生糸への撚り掛けが絹織物布の染色ならびに光反射特性に及ぼす影響について検討する。

II. 実験方法

II-1. 試料布

たて糸に21d2本諸撚りの絹糸を用い、よこ糸に、0,500, 1000, 1500, 2000 T/m の撚り掛け「ありあけ」生糸を用いて織った3枚斜文絹織物を試料とした。

II-2. 酸性染料による染色と染着率の定量

構造式、純度既知の酸性染料 (Acid Blue 92, Acid Red 1, Acid Yellow 34) を用い、試料布の染色性に及ぼす影響について検討した。染色は、恒温振盪機を用い、染料濃度、染浴 pH、染色時間、染色温度の各染色条件を変えて検討し、染着率は、残浴定量法により次式で求めた。

$$\text{染着率}(\%) = (1 - \text{染色後の吸光度} / \text{染色前の吸光度}) \times 100$$

II-3. 白布ならびに染色布の光反射特性の検討

白布ならびに染色布の光反射特性を自動変角光度計 (Goniophotometer GP-200) および変角分光測色計 (GCMS-4) を用いて測定し、角度を変えて見た場合の光沢や色の変化に、生糸への撚り掛けがどのように影響するのかを検討した。

III 結果

III-1. 染色特性に及ぼす生糸への撚り掛けの影響

いずれの試料布も酸性染料による絹繊維の規定染色条件 (pH 3.3、温度80℃、染色時間30分で、染着率はほぼ一定になり、また残浴染料濃度も低く一定になることが明らかになった。以上の結果から、生糸に撚り掛けを行っても絹織物の染色特性には心配されていた程の影響がない。そのため、生糸に撚り掛けを行っても既存の絹染色方法で問題なく染色することができることが明らかになった。

III-2. 白布ならびに染色試料布の反射光強度 (光沢) 特性

入射光角度を -45° と一定にし、受光角度を $-75^\circ \sim +75^\circ$ に変化させて反射光強度の変化についてみると、 $+45^\circ$ 付近で反射光強度が高くなり、正反射光成分が高くなった。絹織物の固定方向によって差は出ているが、生糸への撚り掛けが強くなるに従い、反射光強度は低下している。特に1500 T/m, 2000 T/mのように強い撚り掛けでは見る方向に関係なく光沢が抑えられていることがわかる。

III-3. 白布ならびに染色布の変角による色度点の変化

白布ならびに染色布 (Acid Blue 92, Acid Red 1, Acid Yellow 34) の変角分光測色 (入射角 -45° 、受光角 $-75^\circ \sim +75^\circ$) を行った結果、受光角度が変化すると、色度点 (a^* , b^*) が変化し、色によって色度点の変化方向は異なっていた。

IV. 結論

生糸に撚り掛けを行った絹織物は、撚糸の撚り数が増えれば光沢を抑え、微妙な色の変化を表現できる効果があることが明らかになった。

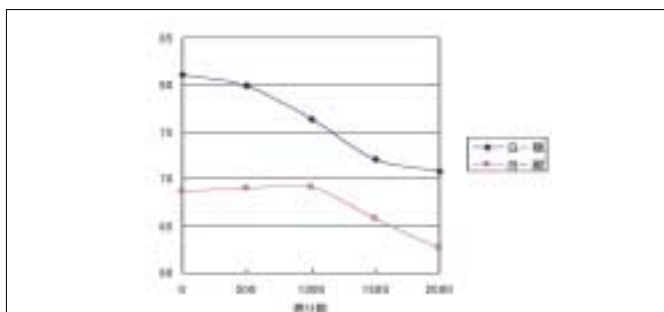


図1 受光角度 45° における各撚り数での反射光強度の変化

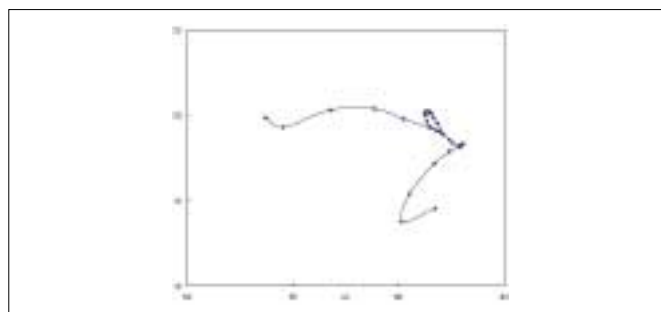


図2 Red 1 受光角による色度点の変化

環境共生型住宅地における樹木の暑熱緩和効果に関する研究

奈良市青山住宅地を対象として

東ゼミ

畦田 貴俊
Takatoshi Azeta



【研究目的】

本研究では、地球温暖化対策のひとつの手法として、樹木による暑熱緩和に着目した。周辺環境の樹木を残して計画された奈良市青山住宅地を対象として、樹木調査および温熱環境、使用エネルギー量の実態調査を行い、その効果を検証することを目的とした。

【調査対象地の概要】

・対象住宅地

奈良市青山住宅地および住宅地内の2戸(N邸・Y邸)

N邸:木造2階建て(2005年竣工)、OMソーラー

Y邸:木造平屋(2005年竣工)

・調査項目および方法

樹木調査:樹種、高さ、樹径、配置(メジャーにより寸法等を測定し、敷地確定測量用配置図に記入)

温熱環境測定:温度、湿度(小型温湿度データロガー(EUW-20S、エスベック製)により10分間隔で連続測定)

光熱費調査:電気料金、ガス料金(ヒアリング)

調査期間:夏期2007年(7~10月)

【結果および考察】

・樹木調査

住宅地全体に日射遮へいに寄与すると考えられる樹木が95本残存しており、そのうち約3割が高さ10m以上であった。樹種は、ミズナラ・ネジキ・ヤシャブシなどが多く、住宅地北側に広がる雑木林とともに、周辺環境の気温上昇を抑制する効果が期待できると考えられた。住宅地の様子は写真

1に示すとおりである。

・温熱環境調査

住宅地内の夏期外気温は、奈良地方気象台データと比較して1~2℃低く、最高気温も低い傾向であった。住宅周囲の樹木量の異なる2戸の住宅の室内温熱環境を比較すると、Y邸の8月の平均気温が27.4℃であるのに対し、N邸は29.8℃で約2℃の差があり、樹木による暑熱緩和効果が確認できた。N邸の居間の温度・湿度変動を図1に示す。夏の居間の平均温度は快適範囲の上限程度で、昼間の活動時間帯はそれを超える環境であったが、居住者はエアコンを使用しないで、通風の確保、着衣による調整により生活していた。

・光熱費調査

住宅の光熱費調査を行った結果、電気代・ガス代ともに佐々ら1)の調査による一般住宅・OMソーラー住宅の1ヶ月使用量と比べて少なかった。

【まとめ】

今回の調査は、奈良市青山住宅地という限定された地域における事例であり、これだけで樹木による暑熱緩和効果を定量的に試算することは難しいが、住宅地周囲の樹木は、夏期の暑熱緩和とエネルギー使用量の削減に寄与し、今後の環境共生的な住まい方のひとつとして提案できると考えられた。

【文献】1)佐々尚美,磯田憲生が、省エネルギーの意識と住まい方に関する調査研究(その2)―奈良市近郊のソーラーエネルギー利用住宅を対象とした場合―



写真1 対象住宅地の様子

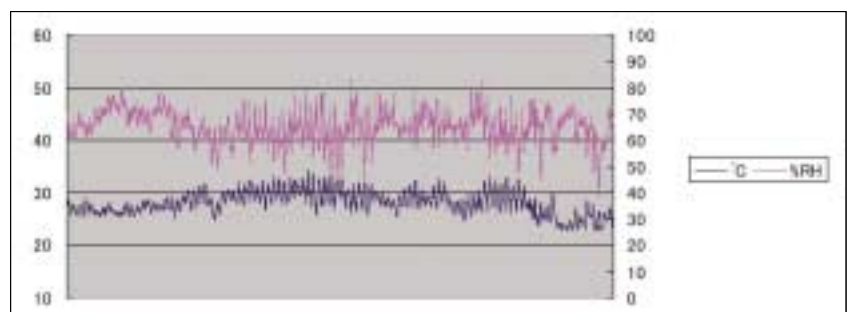


図1 居間の温度・相対湿度変動(N邸:2007.7.14-10.9)

酒のパッケージ色における消費者の評価構造に関する研究 瓶の色とラベルの色の関係



井上 誠
Makoto Inoue



山崎 晃典
Akinori Yamasaki

佐藤ゼミ

・はじめに・

商品企画において、ラベルは消費者に商品情報を伝えるツールとして大きな役目を果たす。酒を例にとると、ラベルの色は商品を知覚・認知、記憶させ、さらにはイメージ喚起と、さまざまな影響を及ぼし、購入手続きの引き金となる重要な要因となることが考えられる。そこで、本研究では、酒の瓶とラベルに表現されている色から消費者が「酒」商品をどのように評価するのかを明らかにする。

・実験方法・

実験試料は13色(基本5色相の高彩度色と、その高明度低彩度色の計10色、および、金、銀、和紙)のラベルを準備して、2色(1.8l容量の茶瓶と緑瓶)の酒瓶に張り付けたものを用いた。実験は、市場店舗に類似する照明条件に設定した室内で行い、瓶の色毎に13色のラベル位置がランダムに置かれるように提示し、被験者にアンケートで答えてもらう方法でおこなった。アンケートは、瓶の色とラベルの色の関係を見て中身の味を想像する質問項目10問と、瓶の色とラベルの色の関係で外見について答えてもらう質問5問の計15問で、それぞれ13色のラベルの中から質問に該当する上位3つをランキングして答えてもらった。被験者は20代以上の男女150人である。

また、アイマークレコーダー(目の軌跡が分かる機械)を用い、質問に対して応答時の被験者の目の動きを計測し

て裏付けデータとした。

・結果と考察・

実験は茶瓶と緑瓶について行ったが、瓶の色が変わっても質問に対する選択ラベルの色の傾向は変わらないという結果であった。言い換えれば、「酒」商品は、瓶よりもラベルの色の影響が大きい。

下記の図は「印象に残るもの」に対する評価結果とある被験者のアイマークデータの視点軌跡である。右図は、全データのアンケート集計結果で、和紙が両瓶で一番印象に残っていると答えている。次に金が両瓶で茶瓶は濃い黄色、緑瓶は濃い赤色となっている。

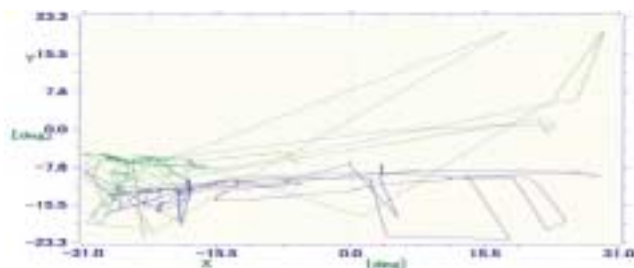
アイマークは、右目が緑の線で、左目が青の線であり、図から分かるように、左目がラベルを確認し、右目が瓶の色を確認している。この被験者は、濃い黄色・金・銀・濃い赤を何度も目で追っている事がわかる。現にこの被験者は1位金、2位濃い赤、3位銀と選択していた。

・まとめ・

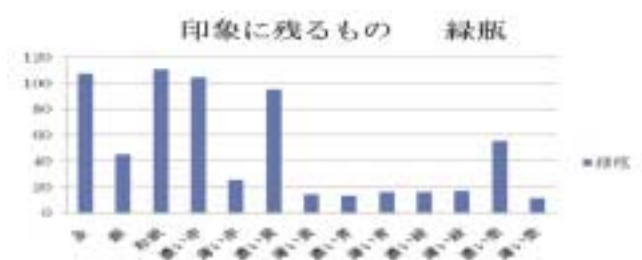
ここでは、総合評価とも判断される「印象に残る色」を代表例で挙げたが、「印象に残る」ことが、消費者に商品を知覚・認知、記憶させ、購買につながる可能性が高いと思う。今回の研究で、市場でも使われていない色を使い、それが多くの被験者に認知させている事もわかりました。色は消費者にすごく大きな影響をもたらし、この影響力が色の可能性であると感じた。



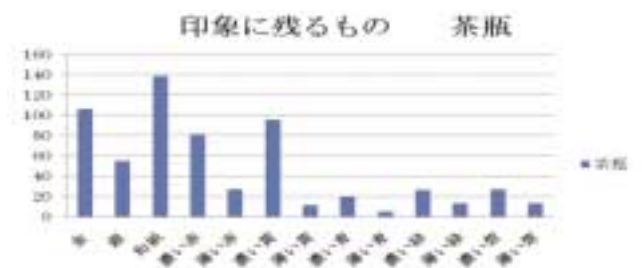
アイマークデータ



軌跡



印象に残るもの



印象に残るもの

湿度環境が臭気評価に及ぼす影響に関する研究

岡本 敦司

Atsushi Okamoto



東ゼミ

【研究目的】

住環境や医療現場における臭気対策は、快適な生活環境を創造する上で重要な課題のひとつである。そこで本研究では、においに対する感受性に影響を与える要因の中で、湿度環境に着目し、それが主観臭気評価に与える影響を検討した。また、室内の滞在時間や、順応などが主観評価に与える違いも合わせて考察した。

【実験環境、項目の検討】

予備実験により、実験室の温湿度制御、臭気物質の選定などの各項目を検討し、研究目的に則した実験環境を整備した。家庭では調理臭が不快な環境として申告される割合が多いことから、対象臭気を調理臭とした。臭気強度の測定にはニオイセンサを使用し、臭気近傍、被験者近傍、実験室隅の3カ所で測定した。気温・湿度の測定にはサーモレコーダーを使用し、0.1m、0.6m、1.1mで計測した。

湿度は二台の加湿器を稼働することで高湿環境(約80%)を維持することができ、低湿環境(約40%)は除湿機一台で維持可能であった。ニオイセンサ値、気温、湿度などの環境条件を実験時間を通して安定させるため、扉の通気溝に目張りをした。臭気対象は視覚的な影響と先入観を排除するため、被験者から見えないように衝立を使用し、臭気対象を背にして椅子に着座させるよう、実験室のレイアウトを工夫した。

本実験においては、被験者として健康な大学生の男女を採用した。実験を開始する前にはアレルギー、体調、においの嗜好など主観評価に影響が出る個人属性についてのアンケートを行うとともに、申告方法の説明をした。また、測定に用いた尺度は臭気強度、快・不快度、容認性とし、時系列に主観評価表に記入してもらった。記入間隔は前室で2回(15分)、入室直後、入室後1分間隔で5回、

その後5分間隔で5回、退室し前室で5分待機後に1回、再入室後の計15回(50分)である。入室後の5回を1分間隔で評価したのは、一般的に通常状態においてはにおいに対する順応は5分程度で起こるとされているため、退室後の前室待機時間を5分としたのも、においに順応した嗅覚が通常の状態に戻る時間に合わせたためである。

【実験結果と考察】

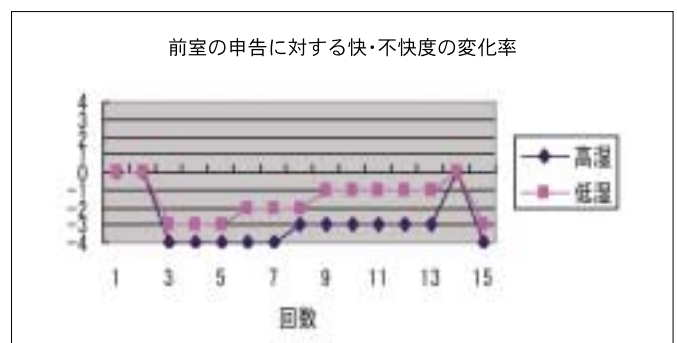
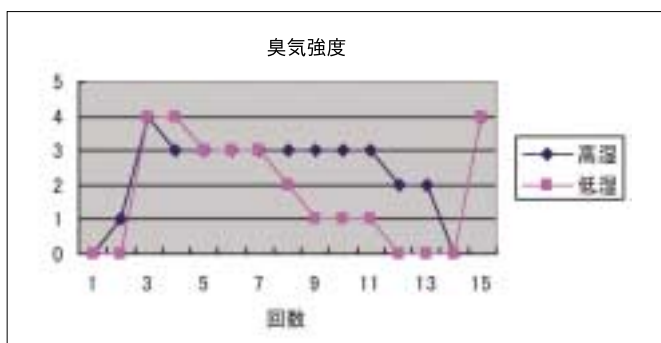
実験結果の一例(被験者C/男性)を下図に示す。低湿環境と比較し高湿環境では、臭気強度、快・不快度の減少がゆるやかである。入室直後の臭気強度申告はどちらの環境とも4であり、差は見られない。しかし、低湿環境では2分後に3、5分後に2、10分後に1、25分後に0となったのに対し、高湿環境では、1分後に3、25分後に2、その後は退室後まで変化無しであり、順応時間に差が見られる。

また、快・不快度の初期申告に対する変化率をみると、低湿環境では入室直後では-3であったが、3分後に-2、10分後-1になっている。高湿環境では入室直後は-4、5分後に-3となり、その後は退室後まで変化が見られず、低湿環境における変化率が小さいという傾向がみられた。

以上の結果より湿度環境の違いが、人のおいに対する主観申告に影響することがわかった。また、今回の結果から性差よりも個人差(例えば鼻の通り具合や体調)の影響の方が大きい結果となった。

【まとめ】

住環境における臭気の評価には個人差や嗜好による差が大きく、低減化対策を考える際には、物理的対策だけでなく、心理的な対策も重要である。本実験において大学生男女を被験者とし、調理臭を対象とした主観評価を分析した結果、湿度が臭気強度と快不快度の申告レベルと順応時間に影響することが示唆された。



住環境におけるカビ・ダニ汚染の実態に関する事例研究



園田恵子 松井佐愛子
Keiko Sonoda Saeko Matsui

東ゼミ

【研究目的】

本研究では、住環境の生物汚染の中でも特にカビ(真菌)、ダニに着目し、その実態を把握するとともに、それに影響を及ぼす要因を考察することを目的とした。

【真菌の測定概要】

調査対象：奈良市内の一般住宅(木造2階建て、地下RC造)
調査項目：付着菌、空中浮遊菌、温湿度(小型温湿度データロガーによる10分間隔計測)、壁表面温度

測定方法：付着菌：スタンプ法(培地：C P加サブロー寒天クリーンスタンプ25「ニッスイ」)測定対象室は地下室、クローゼットとし床、壁面(高さ20・120cm)を測定。

空中浮遊菌：RCSエアースンプラー(培地：アガーストリップ真菌用)で、測定対象室は外気、地下室、クローゼット、リビング(高さ120cm付近の空気40ℓ採取)。

付着菌、空中浮遊菌ともに恒温恒湿機で25℃に一定に保ち72時間培養した後、コロニー数をカウントした。

調査期間：温湿度は2007年7月5日～2007年12月18日
真菌は、夏季(2007年8月1日・9月4日採取)秋季(2007年11月19日採取)冬季(2008年1月18日採取)

【ダニアレルゲンの測定概要】

調査対象：近畿圏内の一般住宅3戸で、すべて木造2階建て、建築年は1981年・1996年・2000年であった。

調査項目：温湿度(小型温湿度データロガーによる10分間隔計測)・掃除状況・換気状況

測定方法：屋内塵性ダニ簡易検査キット(床1m²を一分間掃除機で吸引、アレルゲンレベルを読み取り判定)

調査期間：温湿度は、2007年8月10日～9月12日(夏季から秋季)と、12月22日～2008年1月8日(冬期)に実施

測定日は、9月12日・27日(秋季)、1月8日(冬期)

【真菌測定の結果・考察】

地下室の温熱環境は、夏季(約25℃・86%)に比べて秋季(約

18℃・61%)・冬季(約17℃・50%)は温湿度の低下に伴い付着真菌数は減少した。季節・高さ別でみると(図1)、高さ120cmでは夏季から冬季にかけて真菌数が減少(壁西で約117CFU→39CFU)していたが、高さ20cmの場所では、季節による明らかな減少傾向はみられなかった。除湿を行い、室全体に対する湿度低減しても物陰や部屋の隅などの湿気が溜まりやすい場所では不十分であることが明らかとなった。空中浮遊菌については、外気では秋季に高く(2200CFU/m³)冬季に低く(75CFU/m³)季節による差が顕著であった。室内の真菌数は、風通しが良く調湿材料(無垢床材・珪藻土)が内装材に使用されているリビングが、RC造地下室に比べて、季節を通じて低かった。夏季に地下室で除湿機を稼働させると真菌数が減少した。湿度と空中浮遊菌との関係を見ると(図2)、湿度が高いほど真菌数が多い傾向があり、特に60%を越えるとその傾向が顕著であった。

【ダニアレルゲンレベル測定の結果・考察】

全体として350匹/m²以上が1件、50匹/m²以上350匹/m²未満が3件、10匹/m²以上50匹/m²未満が3件、10匹/m²未満が8件であった。

平均湿度40～50%程度である住宅、掃除や換気頻度が高い住宅ではダニアレルゲンレベルが低かった。床材別に見ると(図3)、絨毯のアレルゲンレベルが最も高いことがわかる。ゴミ量とダニアレルゲンレベルの関係を見ると(図4)、比例する傾向にあった。

【まとめ】

真菌の生育には、季節差や場所による差、相対湿度が大きく影響していた。一方、ダニアレルゲンレベルには、温湿度による影響よりも、むしろ床材の種類や住宅の管理状況の差が大きく影響を与えていた。この結果より、湿度管理と住宅管理の双方の重要性が示唆された。

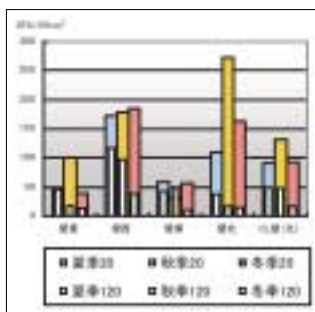


図1

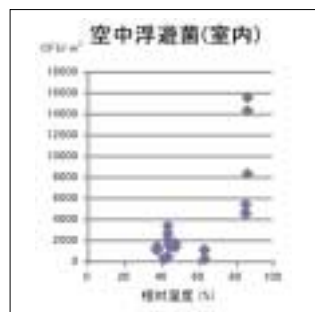


図2

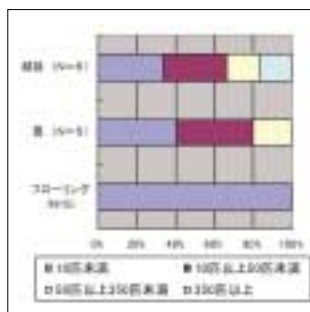


図3

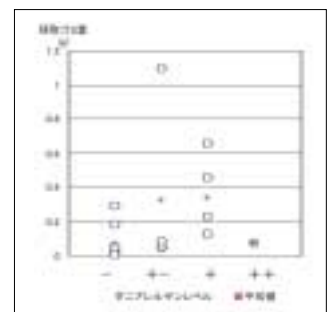


図4

二色配色の嗜好傾向と物体(女性衣服・男性衣服・インテリア空間)の色に対する配色嗜好の関係

佐藤ゼミ

寺林 優 中野 麻由 西村 真実
Yu Terabayashi Mayu Nakano Mami Nishimura



I. 研究目的

ヒトが見分けることの出来る色数は、数百万色とも言われている。ヒトはモノの表面が単色ではなく二色以上の配色で成り立っていることを瞬時に知覚し、「好き」「嫌い」などの感情が生起すると考えられる。一方、モノには用途、目的があり、「モノ」と「色(ここでは配色)」に対する評価(好き・嫌い)をどのように行っているのだろうか。

そこで本研究は目的を想定しない場合の二色配色に対する嗜好が、目的を持った具体的なモノ(女性衣服・男性衣服・インテリア空間)として知覚されたとき、どのように変化するかを明らかにすることを目的として行う。

II. 実験方法

実験試料は、紙媒体に印刷出力し作成した。図1に示すように、配色嗜好を客観的に測定できるとしている市販の「色感テスト」(日本色彩事業(株))の配色例を使用して、別の紙媒体に色再現したものを被験者の配色嗜好測定用試料として作成した。そして、その配色を女性衣服・男性衣服のそれぞれの上衣、下衣画像に貼り付けて、また、インテリア空間では、壁と床面に貼り付けて印刷出力したものを物体への配色試料とした。なお、インテリア空間では、衣服などとは異なり、一般に高明度、低彩度色が用いられるので、電子画像上のR,G,Bに一定の処理を行い、色相を変えないで高明度、低彩度色に変換して試料とした。

被験者を20代男性29人、女性73人、合計102人で行い方法は次の通りである。

まず①色感テスト配色カード70枚 ②女性衣服配色カード70枚 ③男性衣服配色カード70枚 ④インテリア空間配色カード70枚の全280枚の配色例について、好きか嫌いかを○か×で答えてもらった。①～④の順についてはランダムとした。

衣服では、もし自分が着るとしたら、又異性が着ているとしたらを想定して回答してもらい、インテリア空間では自分の家のリビングということ想定し、好き嫌いを回答してもらう。

さらに、「女性衣服」「男性衣服」「インテリア」二色配色では、好きまたは嫌いを選んだ理由を6つの項目から選んでもらった。評価方法については、PCCSに基づく表記法で嗜好タイプを分類し、タイプごとに集計したデータを比較、考察した。

III 結果

1. 色感テストでは、視覚的には明るいもの、イメージ的には比較的よいイメージを持った配色で、共通性の中にも変化があり、バランスのとりのやすい配色が好まれる。

2. 女性衣服の嗜好結果は、色系ならば女性らしいと感じさせる「赤」が好まれ、それになおかつ視覚的に「落ち着いた」イメージを感じさせるものが好まれる。男性の女性衣服に対する好みは、女性よりも明るい色が好まれる。

3. 男性衣服は、まとまりすぎた面白みのない服よりも強烈な印象を与えるもの、色味に変化があり、鮮やかすぎない配色が好まれる。男性衣服に対する女性、男性からの好みには、コントラストに対する嗜好に違いが見られる。

4. インテリア空間は暖色や無彩色が好まれ、寒色が好まれない。派手な色や鮮やかな色の空間より、暗い色や地味な色の空間が好まれる。

5. 配色カードの嗜好傾向と物体の配色嗜好の関係

配色カードで好まれた二色配色例であっても、物体(女性衣服・男性衣服・インテリア空間)としての二色配色では好まれない場合が多く認められた。ヒトは配色に絶対嗜好があるわけではなく、物体認識が優先され、物体としての配色嗜好は二次的な感情として起こる。

図1.二色配色展開例



子供の放課後の居場所



土井 亜砂美
Asami Doi

斉藤ゼミ

少子化の進行、共働き家庭の増加等により、放課後帰宅時の家に家族が誰もいない子どもが増えてきている。地域住民のつながりの変化や、子どもが被害者となる凶悪な事件の多発など、防犯の重要性がますます問われてきている。このような時代背景から、子どもの放課後の居場所をテーマに、畿央大学近辺にあるA小学校を対象にアンケートを実施した。対象は、小学校5年生94名、6年生94名の全188名である。結果を以下に要約する。

よく遊ぶ場所は、男女間や学年間で相違がみられる。女兒は、たくさん人がいて、安心できる場所を好んでいる。一方、男児はグラウンドなど広くて走り回れるような場所を好んでいる。学年間においては、6年生の方は、ファッションや流行に興味を持ち始めるのか、エコー・マミのような色々な商品が置いている店で遊んでいる傾向がみられる。5年生は、前述した男児と同様の結果が得られた。

お勤めの場所においても、男女間や学年間で、遊び場所と同様の結果が得られた。学年間において、遊び場所やお勤め場所で回答が異なってくるということは、子どもは、1年の間に、好きなものや興味を持つことが変化していると思われる。危険な場所においては、「かつらぎの道」に、多数の回答が集中している。危険だと感じる場所に挙げられたそれぞれの場所の主な原因は、環境的要因と人的要因の二つに分けられる。環境的要因は、街灯の数が少ないために、道や公園が暗くなっていること、人的要因は、「事故に遭いやすそう」「人通りが少ないために不審者が出そう」というものである。原因の中で、前述した二つの要因に関するものがある。それは、樹木である。環境的要因は、樹木が邪魔をして人間の視線を遮ってしまっていること、人的要因から考えると、樹木の管理がしっかりと行われていないことが推測される。かつらぎの道は、樹木が街灯の邪魔をして各方面から見えなくなっている。写真1は、かつらぎの道にある街灯である。このように、しっかりと街灯があるのだが、反対側から見ると、樹木が邪魔をして見えなくなっている(写真2)。また、道に面する大部分の

家は、かつらぎの道に家の妻側や背面側を向けていて、居住者の視線があまり注がれなくなっている。観正山近隣公園は、公園内に起伏があるために、階段を上らないと中に入っていけない。その階段の周りには、たくさんの樹木があり、人間の視線を遮ってしまっていて、公園内部を見にくくしている(写真3)。改善策として、樹木が人間の視線を遮っている場合が多数見られるので、徹底した樹木の管理が必要である。樹木と生垣で囲まれている公園が多いが、樹木で公園を囲ってしまうと、樹木の繁茂により、公園内の見通しが悪くなる場合が多いので、鉄柵などで周囲を囲み、公園の外周部との境界を明確にし、公園の安全性を高めていくことが重要である。地域に対しての要望では、公園や自然、遊具がほしいという「公園がほしい」、暗いところやかつらぎの道などに街灯がほしいという「街灯」、カラオケやゲームセンター等の様々な店を置いてほしいという「こんな店を置いてほしい」、道を広くしてほしい、信号を増やしてほしいといった「安全」、水を綺麗にしてほしい、ごみ箱を置いてほしい等といった「清潔」、「その他」の6種類に分類されることが分かる。その中でも、多くの回答を得たのが、「公園がほしい」「こんな店を置いてほしい」である。このことから、子どもたちは、遊ぶ場所やお勤めの場所に来る場所を、もっとたくさん増やしてほしいという要望を持っていることが分かる。

以上のことから、子どもたちは、様々な場所を自分たちの遊び場や、お勤めの場所としていて、男女間や学年間においても異なる変化が表れている。その中でも、自分たちの学校である小学校の校庭が、遊ぶ場所として一番多くの回答を得ていることを嬉しく感じた。子どもたちは、自分たちの母校に愛着を持ち、地域に対する要望でも多くの意見を持っていることから、自分たちが住んでいる町を、より良くしていきたいという意識が高いのではないと思われる。これらの結果は、小学校にお渡しし、子どもたちの放課後の居場所や地域の安全を今一度再確認するための資料として、活用していただこうと思っている。



写真1



写真2



写真3

多世代同居の可能性と課題

橋本 亮一

Ryoichi Hashimoto



齊藤ゼミ

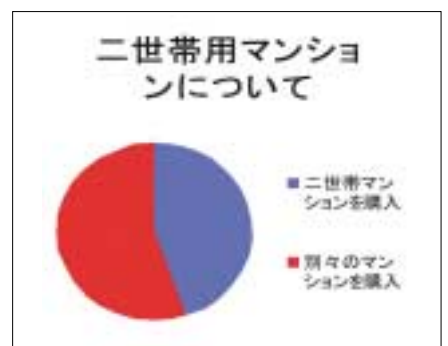
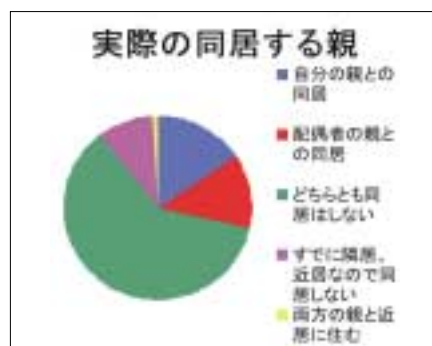
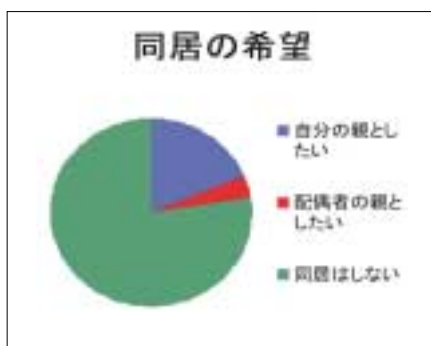
分譲マンションにおける多世代同居の可能性と課題を考察することを目的に分譲マンションに居住する人々に調査アンケートを行った。アンケート回収数は108名である。その結果を以下に要約する。

親との同居に関して、どのように希望するかを尋ねた。結果、「同居をしたくない」という意見が全体で77.6%と大半を占める。次いで、「自分の親との同居を希望する」と考える人が18.5%、「配偶者の親と同居を希望する」と考える人が3.7%である。次に、経済的状況などを含めた現実の状況を踏まえて多世代同居をどのように考えているかを聞くと、一番多い回答は、「同居はしない」で、全体の61.1%を占める。【同居の希望】のときは、全体の77.6%だったので、【同居の希望】のときに「同居したくない」と答えて、現実的には同居を考えている人が、16.5%いることになる。「自分の親と同居する」は15.7%で、「配偶者の親と同居する」は13%を占めており、同居をする人は合わせて28.7%となっている。

次に、自分の親との同居の場合の分けたい設備を聞くと、一番多いのが「キッチン」であり、32.7%を占める。その理由として、「食事の好みが違うから」、「食事する時間帯が違うから」という意見が多い。二番目に多い回答は、「分けたい設備はない」で、全体で25.2%である。三番目に多い回答は、「リビング」で16.8%を占める。配偶者の親との同居の場合に分けたい設備では、一番多い回答は自分の親との同居の時と同じ「キッチン」で35.9%を占める。この数字は、自分の親との同居の場合より、3.2%多い結果である。理由は、「味の違い」や「調理の仕方の違い」が多い。2番目に多い回答は、「リビング」で21.4%と自分の親との同居の場合よりも5%近く多い。この結果から、自分の親と、配偶者の親とではプライバシーを保ちたいラインに違いがあるように推測できる。

最後に、隣り合っており、中でドアを挟んで行き来できるが、テラス以外は共有部分のないほぼ完全に別々になっている二世帯用マンションと、これと同じ価格の2戸のマンションでは、どちらを選択するか尋ねた。全体では「二世帯用マンションを希望する」が44.9%、「別々の2つのマンションを希望する」が55.1%と約半分に分れた。「二世帯用マンションを希望する」と答えた人の理由は、「お互いにプライバシーを保ちつつ、必要な時は簡単に行き来できて理想的だから」などの、プライバシーを保ちつつ、安心できる距離にあるという意見がほとんどである。「2つの別々のマンションを希望する」と答えた人の理由は、「ドア1つではプライバシーは保てない」、「隣同士は近すぎる」などのプライバシーをさらに気にする人が多い、他には、「将来的に必要ななくなった時に売却しづらいのでは」という意見がある。また、間取りへの不満、例えば「リビングは2つがいい」などの意見も見られ、間取りの選択の幅が広がれば、二世帯用マンションの需要の広がりの可能性を示唆するものと考えられる。

これらの調査結果から、様々な質問での理由の多くに「プライバシー」を意識した意見がみられる。よって多世代同居には、「プライバシー」は大変重要なポイントだと推測する。「多世代同居を希望する」と回答した人は2割程度であるが、近居、隣居に住むという意見が自分の親との同居、配偶者の親との同居のどちらも6割以上であることから、近年、多世代同居が減ったのは、親世代との同居を拒否する人が増えたというより、「プライバシー」への意識が強まったのではないかと推測される。この結果から、多世代同居に関する「プライバシー」への意識について、さらなる調査を進めれば二世帯用マンションにはまだまだ可能性があるのではと考えられる。



通販カタログに掲載されている色情報とその色域に関する研究 男女衣服について



平井 康雄 古谷 直樹
Yasuo Hirai Naoki Furuya

佐藤ゼミ

1. はじめに

商品の流通における情報化、グローバル化の中で、画像や文字情報を消費者にどのように伝えるかがますます重要となり、商品の色と色名情報の果たす役割は大きい。本研究では、通信販売のカタログ誌上に掲載されている男女衣服をとりあげ、紙面上の商品の色の出現分布を分析するとともに、消費者が持つ色名とその色域の関係を明らかにする。

2. 実験方法

2-1. カタログ誌上に見られる男女衣服の色の測定

2007年秋、冬を中心に、カタログ全9冊の中の男女衣服画像計973点の色を、分光測色計により測色し、色相別にデータ化し、分析した。

2-2. 色域評価用カラーパネルの作成、評価方法

カタログ上に出現頻度が高かった青、緑、ピンク、ベージュ、茶の5色名を取り上げ、被験者実験を行った。A3サイズのN4グレイ台紙を用い、色名毎に、マンセル①色相-明度、②彩度-明度の2種類の平面色座標軸を設定し、その上にマンセル値既知の1.0cm角のカラーカードを貼りつけて、被験者への色域評価用カラーパネルとした。カラーカードは日本色研事業社製 新建築デザイン色票と管理色票の中からそれぞれの色名に該当すると思われる十分な範囲を網羅するよう収集した。また、色だけに集中できるよう台紙上に罫線等は引かなかった。

評価方法は、被験者男女100人に、計11枚のパネルを見てもらい、被験者自身が考える各色名の範囲を、パネル上においた透明なフィルム上に書き込んでもらった。

3. 結果と考察

3-1. 色名の出現頻度とその色域分布

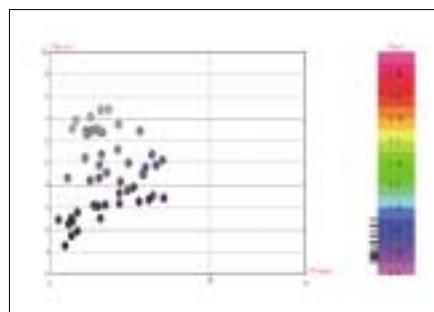
カタログ上の画像に表現されている「色」と文字情報「色名」の関係は多種多様であった。特に色名はJS慣用色名(JS Z8102)に準じているものは少なく、メーカーの自由なネーミング色名が使われており、商品のイメージアップのツールに用いられていると考えられる。消費者を混乱させるような曖昧な表現が目立った。

3-2. 色名別分布グラフと色域評価結果

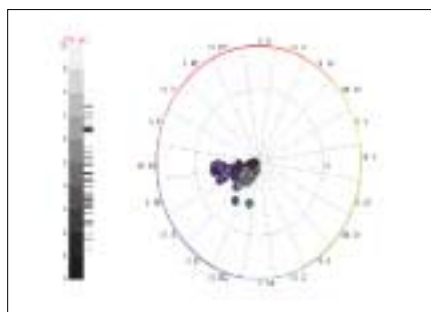
色名青は、他の色名に比し、商品への出現頻度も高く、またその色は色度の分布範囲が広いことがわかった。色名青は色相BGから色相PBにかけて広く分布しており、同様に、明度-彩度グラフでも分布幅が広い。また、被験者による色域評価結果においても、色名青は、色相の幅が広がった。日本では、昔から、「あお」を青、蒼、藍、碧とも書く色名文化があり、色名別の分布グラフや識別が曖昧な色名表からも青という色名は消費者に幅広いイメージを与えていると言える。

4. おわりに

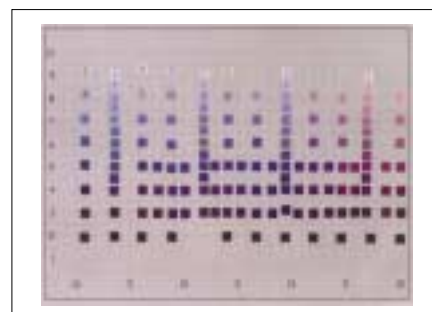
実験から、カタログ通信販売における色名は、消費者の色域に大きく影響していることがわかった。一般に認知度が高い慣用色名の他に、系統色名タイプ、複合語のタイプの色名などの大まかな範囲の色名が多くみられた。これらは、認知度の高い色名とは違い、一部の消費者にしか認識できない色名である。また、明度、彩度に関する修飾語や、複合語タイプの色名は、気分的な概念で修飾語が使用されるなど不明瞭な点が多く、特定の系統色名体系ではないと推察できる。カタログ通信販売では、消費者は印刷上の色情報を重視して商品を判断せざるを得ない。返品、クレームなどのトラブルを少なくするためにも、基本色名や慣用色名を含めた、明瞭な系統色名の普及が望まれる。



色名青の明度-彩度グラフ



色名青の色相環グラフ



評価結果 色相-明度パネル



dress



research



furniture



interior



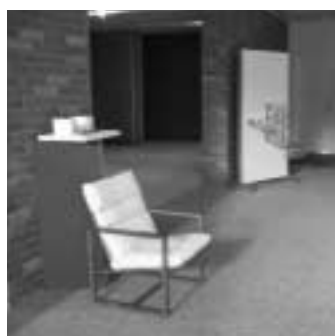
architecture



第2回 卒業研究展覧会

日時：3月19日(水)～4月2日(水)

場所：学校法人冬木学園畿央大学 冬木記念ホール ギャラリー







畿央大学
健康科学部健康生活学科 人間環境デザイン専攻
第2回 卒業研究発表会

日時：2月18日(月) 8:55~19:00

2月19日(火) 8:55~17:00

場所：学校法人冬木学園畿央大学 101教室

最優秀賞(学長賞)：西嶋 健太郎

優秀賞：庄司 考太郎

美馬 利雄

森本 実希

山形 綾香

吉村 文里

講評

学生諸君、卒業研究の中に君たちのこだわりや頑張りを見せていただいた。君たちの手ごたえはどうだろう。すべてが十分に満足できる成果を残せたわけではないだろう。後で見返すと、もっと考察を加える必要があったところ、もう少し手を加えればよかったところ、反省すべきところ、気づくところがあるに違いない。

大学での卒業研究は終わったが、君たちの頑張りは今始まったばかりだ。大学で学んだこと、考えたこと、苦労したことは、そのままではないにしろ、きっと社会で活かされる。謙虚に周りの人の意見を聞き、自分でじっくり考え、自分の信じる道を進んで行ってほしい。君たちの頑張る姿が、わたしたちの誇りになり、後輩たちの道しるべになる。

三井田 康記

人間環境デザイン学科長

今年度の卒業制作・卒業論文は74名、59課題と、大変多く、その分バラエティに富んだ内容でした。最後の1年間は、自ら思考し、産みの苦しみと楽しみを感じつつ授業とは異なる視点からモノを見る良い体験が出来たのではないかと思います。発表を聴いて、テーマ、内容から、私の独断と偏見に基づき5つのKey words別にグループ分けしてみました。

①コミュニケーション：マンション、学校、地域などの空間づくりと人のコミュニケーション、情報コミュニケーションなどに関するテーマ17題 ②ユニバーサルデザイン、バリアフリー：椅子やテーブル、衣服、収納、情報などに関するテーマ15題 ③デザイン表現、アイデアものづくり：新しい空間、意匠表現、アイデア商品などに関するテーマ15題 ④環境：古民家再生、環境をとりまく各種因子、廃材利用などに関するテーマ9題 ⑤教材研究に関するテーマ3題
まさしく、学科が目指す「人間・環境・デザイン」分野の多彩で興味深い内容がバランスをもって構成されています。皆さん方の力量と可能性を頼もしく思うとともに、そのまま社会における活躍の広がりを見せているようです。自信をもって頑張ってください。

佐藤 昌子

私自身が卒業設計を行ってから四半世紀以上の月日が流れました。プレゼンテーションの内容はすでに記憶の彼方、設計案の内容は今から思えば赤面の至りです。しかし、その頃研究室でラジオから流れていた音楽、同級生たちの席の配置、部屋で作った奇々怪々な夜食のメニューなど、どうしてもよいことに限ってありありと覚えています。そして、自分が何日間不眠不休で働けるかの限界をその時初めて知ったことを。

今回の皆さんの作品の中に、正直なところ、脱帽できるほどのものはありませんでした。しかし何人かには、才能の片鱗や創ることへの愛情を感じ取ることができ嬉しく思います。今回の経験を通じて皆さんが「自分はこれだけ頑張れる」「自分はこんなに怠け者だった」「自分は未だ何も知らない」「自分はこんなに建築が好きだ」などなど新しい自分に気づき、これからの人生への糧にされることを期待します。

藤井 豊史

私は、昨年4月に本学に赴任したため、4回生の皆さんとは授業等で会う機会は少なく、名前と顔が一致する人はわずかです。ですから、中間発表と卒業研究発表会において、全員と顔を合わせ、ひとりひとりの研究発表を聞くことができたことは貴重な機会でした。

卒業研究発表会では、10分間という限られた時間や、人前での発表の緊張から思ったとおりのプレゼンができなかった人もいるでしょう。先生方からの意見や質問に、思わず「きつい」と感じた人もいるかもしれません。しかし、人間は、緊張する機会や辛辣な意見を受けることなしには成長することができないといえます。今回の経験を糧に社会人としてさらに成長されることを期待しています。今後は、母校と卒業生としての新たな関係が始まります。これから歴史を作り上げていく母校に対して、辛辣な意見を含む暖かな応援をお願いいたします。

斉藤 功子

人間環境デザイン学科主任

2008年2月 2期生の卒業研究発表が行われたが、独自の視点で提案された作品、建築模型、論文があり、興味深く拝見させてもらった。4年間の集大成として試行錯誤を繰り返しながら生まれたそれぞれのものは、自分の提案したものがうまく表現できたであろうか？情熱を注ぎ込みずばらしいものになったものが多かったと思うが、中にはうまく伝わってこないものもあった。多分行った本人が一番わかっているのではないかと思います。何かテーマを決め、自分の考え、思いをどのように伝えるか？この卒業研究という中で何か身になるもの、あるいは感じたであろうと思うが、これを1つのステップとしてさらなる躍進を願っている。

皆さんと過ごした4年間 私自身もいろいろと学ぶべきことがありました。感謝いたします。

井上 龍彦

畿央大学に就任して初めて卒業制作の指導をさせていただきましたが、十分な指導ができなかったことを悔やんでいます。デザインは、問題等を抽出して要求を見出す分析力と、要求に対応して色々なアイデアを形にまとめて総合化する力が必要です。そういう意味で、分析力を発揮できるよう誘導しきれなかったように思いました。発表会の全体を通して、作品の完成度の高いものは、分析力も総合力も優れたものであり、結果的に斬新で魅力のあるものにつながったのだといえます。

ともあれ、色々な失敗や苦労を重ねて作品として一つのものを作り上げたことは、今後の人生においても貴重な体験として長く記憶に残るはずで、そして、楽しかったことも含めて、この体験を時々思い出して社会での仕事などに生かして欲しいと思います。

中山 順

卒業研究発表会が修了しました。今年度は「多彩なテーマ」「力作ぞろい」でした。成果品はもちろんのこと、1年を通じてのみなさんの取り組みの姿勢や、研究の過程についても十分に評価したいと思います。

年が明けてからの、みなさんの追い込みは、大学時代の4年間に味わったことのない、心身共に切迫したものだったのではないのでしょうか。研究がうまく進まず落ち込んで帰って行っても、次の日には気持ちを立て直して学校に出て来る姿に頼もしさを感じたものです。

ある人が「人生は短距離走の連続」と言いました。

次の機会にも思い切り走って下さい。その後には、何とも言えない充実感と、達成感が待っているはずです。

村田 浩子

畿央大学の2期生として4年間学んだことを一つの作品として仕上げるまでにはいろいろと苦労があったと思いますが、最後までやり遂げた達成感、満足感はしっかりと覚えているはずです。苦労した時間も楽しかった時間もそれぞれ素敵な思い出となり、今後、この貴重な経験を社会人のお仕事にしっかりと生かしてほしいと願っています。今後のご活躍を期待しています。また、陰ながら応援しています。

李 沅貞

1人1人の発表を聴き、作品に触れて、見て、デザインによる人の注意のコントロールを考え直すいい機会になった。心理学の話として一般的に言うと、注意はフィルタリング—あなたの意識に浮かぶ情報と浮かばない情報とを選別する一機能であり、その働きはタスク—あなたが今やっていること—によって決まる。デザインはタスクをコントロールし、タスクを通じて間接的にフィルタリングをコントロールする。これはあくまで私の持論だ。

さて、作品を見直してみよう、あなたの日常生活を考え直しながら、あなたは、本当に、1つの場所や時間帯の中で、1つのタスクしかやってないのかな？携帯を見ながら、友達と話しながら、音楽を聴きながら、食べたり飲んだりしながら、関係ないことを考えながら……集中して1つのタスクだけをやってる方が、珍しいんじゃないのかな？意識の漂流が自然状態とすると、デザインはその漂流に対して何ができるだろうか？

金敷 大之

二日間に渡って行われた卒業制作・論文の発表会。多彩なテーマの発表に皆さんが人間環境デザイン学科で学んだ内容の幅の広さを感じました。テーマ決定、実施計画、制作や調査・実験などの各過程でこれまでにない経験を重ねてきたことも伝わってきました。やはり真摯に取り組んだ成果発表は心に響くものがありました。全てを終えた今、卒業制作・論文に向き合った一年を改めて振り返ってみてください。解決の糸口が見えたり結果を導き出せたときの喜び、たどるべき過程を省略したり答えを急いで完全燃焼できなかった苦い経験、良かったことも反省すべきことも全てこれから社会に羽ばたく皆さんの糧となっているはずです。この経験がかけがえのないものだったことに気づくのは時が過ぎてからかもしれませんが、共に過ごした時間は私にとっても貴重なものとなりました。畿央大学を巣立っていく皆さんのこれからのご活躍を祈念しています。

東 実千代

あっという間の4年間だったことと思います。1回生は大学という環境をならすために一生懸命。2回生は後輩もできて少し先輩という意識を持つために一生懸命。3回生は専門分野が一層難しくなって一生懸命。ついに4回生は卒業研究で必死の一生懸命だったと思います。大変だったと思いますが、大変だったことを感じたのは自分の成長を意味していると思います。思い通りにいかなかった学生もいたと思います。でも自分ではじめて課題を作成して仕上げたことというのは大学に来てからでしか味わえることはできません。これから社会人としてまたこういう機会があるかもしれませんが、そのときは胸をはって必ずこの過ごした時間を思い出して前に進めると思います。これから先いろいろなことがあると思いますが元気ががんばってください。あと、キツイことも多々言ってしまうごめんなさい。でもすごく楽しかったです。ありがとう。

奥村 亜希

おそらくこの学科の中でほとんどの人たちがデザインやものづくりに関わっていくことと思いますが、覚えていてほしいことがあります。

「ものを創る」ということは、その反面、「破壊する」という行為でもあります。作品の中でいろいろな材料を使用したり、敷地を設定したりしてきたと思います。しかし、一度振り返って考えてみましょう。その材料を全く別のものに変えてみて、価値のある作品だったでしょうか。無垢なままが一番いい状態だったかもしれません。その敷地に新しく建築を建ててしまうのが、本当にその周囲にとって良いことでしょうか。その空地や、古い家屋、建物が一番気に入っていた人たちがいるかもしれません。

いろいろなところへ旅立ちすることと思いますが、せめて、自分たちが創ることが、破壊行為であることを理解し、しかし、それだけの価値があるものを創り上げるのだという意気込みで、社会で頑張っていたいただきたいと思います。

長井 典子

今年は、全員のプレゼンテーションを漏れなく視聴し、評価の会議にも参加した。いずれの作品も真摯に取り組まれた成果と見て取れた。

テーマが多彩で広い分野にわたっているので、当職の専門分野である「建築」の作品に関して感想の一端を述べる。

大多数の作品は、制作者である学生が、自らクライアントになって、与条件を設定し、本学で学んだ建築に関する知識・技術を駆使し、設計者としての豊かな感性によって作り上げたもので、建築デザインの多くの可能性を広げていく提案をしているように思う。

これらの作品に込められた提案が、一過性のアイデアに留まらずに、建築の技術が多岐にわたる状況をふまえながら、今後の実務のなかで発展的に有効に活かせるようなものに昇華させてほしいものである。

岡井 豊治



人間環境デザイン学科 教員

教授

学科長 三井田 康記
主任 齊藤 功子
佐藤 昌子
藤井 豊史
井上 龍彦

准教授

中山 順
村田 浩子

講師

李 沅貞
金敷 大之

助教

東 実千代

助手

奥村 亜希
長井 典子

特任講師

岡井 豊治

作品集 編集委員

長井 典子
奥村 亜希

岡本 裕樹
中山 紀江
坂東 桃子

卒業制作・論文作品集 2

2008年3月19日 発行

発行 畿央大学 健康科学部

健康生活学科 人間環境デザイン専攻

代表 学長 冬木 智子

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2

印刷 株式会社 明新社